様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：３２６８３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５３０６６６

研究課題名（和文）日本宗教の異文化布教に関する社会学的研究

研究課題名（英文）A Sociological Study of Dissemination by Japanese New Religions outside Japan in Countries with Different Cultures

研究代表者
渡辺　雅子（WATANABE, Masako）

明治学院大学・社会学部・教授

研究者番号：５０１３０８５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：日本の新宗教の海外布教について、同じ宗教が異なる文化をもつ国において布教展開する場合、その成否を規定する要因は何なのかという問いのもとに、対象として主に立正佼成会をとりあげ、その展開過程、活動の実態、現地の文化的要素の取り入れと宗教独自の中核的部分の保持、現地信者の受容のあり方の実態等について、ブラジル、アメリカ(ハワイ)、韓国、台湾、タイ、バングラデシュ、インドで、聞き取り調査を実施し、事例研究を積み上げ、比較検討した。

研究成果の概要（英文）：What brings Japanese new religions success or failure when they disseminate their teachings in foreign countries with cultures different from Japan's? To find out, I have done research on several Japanese new religions, especially Rissho Kosei-kai, in Brazil, the United States (Hawaii), South Korea, Taiwan, Thailand, Bangladesh, and India. I studied their historical development, the status of their activities, their adaptation of other countries' cultural elements to their religious activities, their preservation of core values, their members' acceptance of the faith and teachings, and so on. After I conducted interviews and collected accounts of activities, I made a comparative study of Japanese new religions on the foreign soils of different cultures.

研究分野：宗教社会学

キーワード：新宗教　日系新宗教　異文化布教　海外布教　立正佼成会　在家仏教　現地化　信仰受容

１．研究開始当初の背景

日本の宗教が海外に進出する場合、当初は海外にいる日本人・日系人を対象とすることが一般的で、日系人の多い地域では、日系人を中心に布教が展開し、その後、非日系人をいかにして取り込むかがその布教の拡大を規定する一つの要因だった。筆者はこれまで、世界最大の日系人口があるブラジルを対象に、異なる日系新宗教が同じブラジルという土壌に展開する場合に、その布教の成否を規定するものは何なのかという点について、複数の日系新宗教の調査を行った。そして、これらの事例を比較検討することによって、ブラジルにおける日系新宗教運動の課題として、拡大課題群、適応課題群、定着課題群、組織課題群を提出した。

これらの課題群は、国が変わっても応用できるものもあるが、また文化が違えば異なるところもある。これらの課題群をより普遍的なものにするためには、ブラジル以外の国においても異文化布教の課題を探ることが必要である。ブラジルの事例は、いわば、土壌の同じところに異なる種をまいた場合であるが、それでは同じ種を異なる土壌にまいたらばどうであろうか。つまり、同じ宗教が異なる国においては、どのように変容し、異なる展開を見せるのか。異文化布教についての課題に接近するためには、この点も不可欠であると思い、今回の研究テーマを策定した。

２．研究の目的

人の国際移動とともに宗教が移動し、そこにエスニック・チャーチが建設されるということは、従来からあるが、ここで課題としたいのは、日本の宗教がエスニックなものを超えて、現地の人々の心をつかみ、布教することにかかわるものである。

(1) 日系宗教の異文化布教に関する文献資料をとおして、その事例を把握し、内容を精査し、これまでの議論を整理分析する。

(2) 日系新宗教の異文化布教の課題に接近するにあたり、同じ宗教が異なる国に布教した場合、どのように展開し、それを規定する要因は何なのかという視点にたちつつ、綿密な事例研究を積み上げる。

(3)同じ国に日本の多様な宗教が入った場合と、同じ宗教がさまざまな国に入った場合の展開の諸相という、二つの側面から検討し、かつ、受け入れ国の独自の宗教文化を勘案しつつ、展開の諸相に影響をあたえる要因を考察する。

３．研究の方法

研究の対象として、仏教系の新宗教である立正佼成会を主としてとりあげる。立正佼成会は、法華三部経を所与の経典とし、双系の先祖供養と心直しを標榜する在家仏教教団である。日本の新宗教としては、創価学会に次ぐ第二位の信者規模がありながらも、これまではかならずしも積極的に海外布教を行っているとは言えなかった。しかし、近年、バングラデシュをはじめとして布教の拡大は目覚ましいところがある。そこでは、日系人を媒介にするのではなく、現地人布教が行われている。

立正佼成会の調査は、アメリカ（ハワイ）、ブラジル、韓国、台湾、バングラデシュ、インド、タイで行った。なお、立正佼成会以外に、ハワイでは、金光教、真如苑、創価学会、天照皇大神宮教を、ブラジルでは、金光教、霊友会、稲荷会の調査を、韓国では金光教の調査を実施した。調査・研究の方法は以下のとおりである。

(1) 現地での活動の参与観察、日本人リーダー、現地リーダーからの聞き取り調査、資料収集。

(2) 日本の本部での担当部署での聞き取り調査および資料収集

(3)現地の文化、宗教関連文献の収集と読み

込み。

４．研究成果

(1)ハワイ･･･立正佼成会の最も古い海外拠点である。現地の日系人の入会から始まったが、その後、日本で入会し、アメリカ軍人と国際結婚した日本人女性が加わり、一時期、ハワイ生まれの人々と彼女たちとの間に軋轢があった。信仰継承はされている。大きな行事以外の毎月の定例行事は、日本語グループと英語グループに分かれて行っているが、日本語グループには一世（高齢者）が、英語グループにはハワイ生まれの日系人と数は少ないが非日系人が参加し、言葉の問題と両者が担っている文化の違いによってすみ分けをしている。教会長は日本からの派遣が続いたが、2015 年にアメリカ国籍（日本生まれ、父は元軍人のフィリピン系米国人、母は日本人）の女性がはじめて現地人教会長となった。

(2) ブラジル･･･アメリカとは違い国際結婚の日本人はおらず、家族移民の日系人である。ブラジルでは 1980 年代後半からおこり、90 年代以降大量化した日本へのデカセギによって、多くの日系人が日本にデカセギにいった。これは日系宗教にとって転換をせまり、日系人が主体の佼成会にとっても影響を与え、かつ世代交代の時期にもなった。現在では教会内の掲示もポルトガル語である。高齢の日系人にとっては、教会道場は日本語を話す居心地のよい場でもある。これまでは日系人が中心だったが、仏教セミナーをとおして非日系人布教への取り組みがなされている。こうした非日系人に対してはゆるやかなアミーゴ会員制度をつくり、その数も徐々に増加している。また、非日系人およびポルトガル語のほうが得意な若い日系人層と、高齢の日本語主体の日本人・日系人とはすみ分けをしている。非日系人の中に幹部会議に参加する人が現れてきている。

(3)韓国･･･韓国では、在日韓国人が布教にあたって大きな役割を果たした。信者は 100%現地韓国人である。日本人の派遣教会長の時代をへて、日本で入会して活動していた在日韓国人が帰国して、その中心を担うようになった。日本の植民地支配に起因する反日感情が根強い中で、日本的な要素を目立たなくする工夫や、現地の仏教文化の要素の取り入れによって文化的な違和感を減じている。韓国佼成会の場合、その中心人物が日本語、韓国語双方に堪能で言葉の壁を越えていることが利点であり、信者の育成にも現地の文化、価値観、行動様式を理解しつつ、取り組んでいる。

(4)台湾･･･日本の植民地になったが、その統治政策の違いとその後の外省人による支配に対する反抗もあって親日的な国情である。信者の年齢層は 70-80 代が多く、彼らは、戦前に日本式の教育を受け、日本に懐かしさをもっている人々である。しかしながら高齢化や死去などによる世代交代の時期で、台北教会、台南教会とも、近年比較的若手（50-60 代）の現地人教会長に変わった。しかし、植民地時代に日本の教育を受けた人々と戦後世代では、言葉の点でも前者は日本語と台湾語、後者は北京語が主体で台湾語は読めないというように、同じ台湾人の中にも文化的、言語的断絶があり、信者の高齢化と世代交代の課題を抱えている。光明灯、観音信仰など台湾の仏教文化の要素を採用している。

(5)バングラデシュ･･･イスラム教国の中のマイノリティの仏教徒（全人口の 0.6%）の間に佼成会が急速に布教拡大している。上座部仏教とは友好関係を保ち、佼成会は生活仏教として受容されている。仏教徒は就職差別等もあり、また婚姻関係も仏教徒同士で結んでいる。イスラム教国でのマイノリティ性のゆえに、上座部（小乗）仏教、大乗仏教の区別

よりも「同じ仏教徒」としての意識がある。さらに、日本はバングラデシュの最大の支援国であり、そのイメージは大変よく、極めて親日的であり、ジャパンブランドとしての信頼性を背景にしていると思われる。

バングラデシュでは佼成会は次のような役割を果たしている。①仏教徒間の連帯の役割。バルア仏教徒(ベンガル人)と少数民族の仏教徒は溶け合わず交流もしなかったが、佼成会をとおして交流が生まれた。また、仏教徒が結集することに果たしている佼成会の役割は大きいものがある。②女性のエンパワーメントにおいて果たす役割。男性中心で女性は奥であるとの位置づけの社会において、女性が中心になって活動をする場があり、またその訓練もされている。佼成会の提供する「家庭教育」セミナーは人気があり、女性たちが主体的に運営にあたっている。③イスラム教徒による仏教寺院襲撃事件を契機としての宗教協力。2013 年、イスラム教徒による仏教寺院、仏教徒の家の焼き打ちがあった。その後、佼成会が中心になってイスラム教、仏教、ヒンドゥ教徒をつなぐ運動が行われている。④近代社会に適合的な行動・態度の獲得。生活実践としての佼成会において、時間を守るなど近代的態度を獲得し、職業上の地位向上に役立っている。

僧に頼んで経をあげてもらうのではなく、自分自身でそれも自分達の言語で読経することができること、また、佼成会の特徴である小集団である法座で、人の話を聞き、自分の気持ちを出せることについても魅力を感じている。また、青年たちは 12,000 人を集めた大会を成功させた。

バングラデシュでの布教の成功は、日本からの新宗教がほとんど入っていない国だったこと、日本人教会長に人材を得、かつ日本の本部で海外修養生として日本語を学び、教義と活動を学習した現地の青年がスタッフとして定着したことで、異文化布教で重要な言葉の問題をクリアした。

(6)<u>インド</u>･･･デリー、コルカタ、ガヤに拠点があるが、地域的に特徴がある。デリーはヒンドゥ教徒、コルカタはバングラデシュから移住したバルア仏教徒、ガヤはヒンドゥ教の下層カースト(不可触民)からカーストによる差別のない仏教徒に改宗した新仏教徒が主体である。仏教徒に改宗したものの、仏教を学ぶ機会がなかった人々が佼成会をとおして仏教の学習をしている。コルカタでは支部長に人材を得、着実に教勢を伸ばしている。また、近年、女性教師が中心の法座所ができ、佼成会の家庭教育を学校教育に応用しようとしており、女性たちは活発である。

(7)<u>タイ</u>･･･アメリカやブラジルと同じく、移住した日本人によって布教が開始した。上座部仏教が極めて強く、一貫して優位性を保ってきた国であるがゆえに、布教が難しいところもある。日本人とタイ人は、別の日に集まるなど、すみ分けをしている。

教会道場の所在地バンコクには同一敷地内に、研修センターが建設され、南アジア地域の信者の研修に用いられている。

以上、国別に状況をみてきたが、以下の点も指摘できる。

(8)佼成会の基本的な行である、父方母方（夫方妻方）の双系の先祖供養について、特に「総戒名」とよばれる両家の名前を書いた短冊状の紙の安置に関しては、祖先祭祀がさかんな韓国、および台湾で、抵抗があった。韓国は自宅に「総戒名」祀り込むことに対して（自宅に祀ると鬼神がくる、悪いことが起きる)、台湾は父系の先祖観から双系の先祖は受け入れられにくい。

(9)日本の宗教が布教していく場合、日本に対

する意識（反日・親日）が布教に影響を与えている。反日感情の強い韓国、親日的で戦前に日本の教育を受けた人々の存在する台湾（しかし高齢化し、日系人がいる地域と同様の世代交代の問題が発生）、極めて親日的で日本が尊敬されているバングラデシュなど、日本から来た宗教であることに起因することによる受容の要因がある。

(10)南アジアの上座部仏教圏では、一部ヒンドゥ教徒の信者も獲得しているが、ほとんど仏教徒が信者になっている。出家仏教である上座部仏教とは友好的な関係を形成し、在家仏教である佼成会は生活仏教として受け入れられている。バングラデシュでは、仏教徒はイスラム教国でのマイノリティであり、インドではバングラデシュから移住した仏教徒や、ヒンドゥ教から改宗した新仏教徒のあいだに布教をのばしている。マイノリティではなく、上座部仏教が確固たる位置を占めているタイでは、布教の進展が難しい。

(11)日本人移民から始まった国では、日本人・日系人の高齢化や死去による世代交代の時期にあり、日系人を基盤としたがゆえに、その後の非日系人への布教展開への転換に難しさを抱えている。日本人・日系人の求めるエスニック･チャーチとしての役割への要望のゆえに、非日系人とはすみ分けを行っている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　6 件）

① 渡辺雅子　2016「韓国立正佼成会における在日コリアン二世の女性教会長の生活史」『明治学院大学　社会学・社会福祉学研究』146 号、113-199。(査読無)

② 渡辺雅子　2015「韓国立正佼成会の支部組織の転機と韓国人支部長の信仰受容の諸相」『明治学院大学　社会学・社会福祉学研究』144 号、83-139。(査読無)

③ 渡辺雅子　2014「在日ブラジル人の生活の諸相――エスニック・ビジネス、エスニック・メディア、宗教に着目して――」『社会学科コース演習リーディングス』213-223、明治学院大学社会学部社会学科。(査読無)

④ 渡辺雅子　2014「バングラデシュにおける立正佼成会の信仰受容」『明治学院大学社会学･社会福祉学研究』141 号､65-122。(査読無)

⑤ 渡辺雅子　2013「立正佼成会のアメリカ布教」『明治学院大学　社会学・社会福祉学研究』140 号、1-31.(査読無)

⑥ 渡辺雅子　2012「日本宗教(日系宗教)」世界宗教事典編集委員会（編集代表：井上順孝）『世界宗教百科事典』丸善出版株式会社、766-767。(査読無)

〔学会発表〕（計　1 件）

① Masako Watanabe “Acculturation and Ethnic Boundary maintenance：Japanese Religions in Brazil and Brazilian Religions in Japan” 日ブラジル学術協力シンポジウム（JAPAN-BRAZIL Symposium on Research Collaboration JSPS-FAPESP）日本学術振興会・サンパウロ大学共催、2013 年 3 月 15 日、立教大学（東京都豊島区）

６．研究組織
(1)研究代表者

渡辺　雅子（WATANABE　Masako）
明治学院大学・社会学部・教授
研究者番号：50130852